

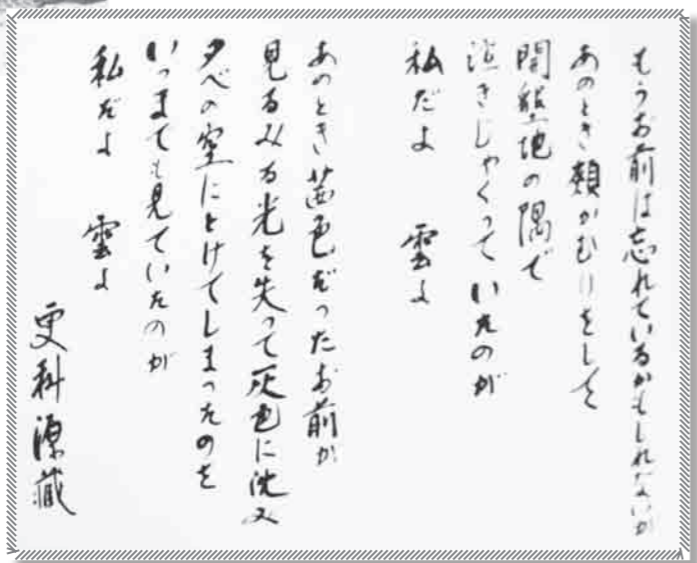


更科源藏(さらしなげんぞう)
●1904(明治37)年、弟子屈町熊牛原野(南弟子屈)に生まれ、1985(昭和60)年に81歳で逝去。東京麻布獣医学校を中退した後、尾崎喜八、高村光太郎に師事し、詩作を中心に郷土史、アイヌ文化研究など主に文学活動が続けた。
▶弟子屈町で所蔵しているさまざまな資料を紹介する。

著書の検印などに使っていた自作のエゾシカ印



台座になる石を探す永田洋平



更科自筆の碑文

更科源藏文学碑「雲」②

文学碑の制作は、永田洋平と同僚で、顕著碑「風雪の碑」も手がける彫刻家・米坂ヒデノリ(釧路短期大学教授―当時)です。

米坂は、更科が高村光太郎から「何かあったときはカナモノでない方がいいよ」と聞いたことがあると述懐していることや「モッコリ」とあの辺りの土からでたヤツ(弟子屈産の石―筆者)という更科の希望をかなえるため、永田と米坂は石探しを始めます。硫黄山近くの国有地から、営林署と環境庁(当時)の立ち会いで、岩質が地味な輝石安山岩を選び、運び出しました。台座となる自然石を「チセ(家)にかたどり、アフリカ産の黒みかげ石に、更科自筆の詩「雲」を刻んだ詩が完成します。

1977(昭和52)年10月1日の「更科源藏文学碑除幕式」は、小雨が降る肌寒い天候でしたが、弟子屈町民や道内外の文学関係者ほか、更科と交友のあった人々が集い、行われました。式では、碑の除幕に続いて、詩人・佐々木逸郎が碑文「雲」を朗読します。

「雲」は、更科が札幌に家を建てたころ、子どもを連れ近くの銭湯へ行つた帰り道、西に沈む夕日と金星がきらめく空から、幼いころ畑の収穫で忙しい父母や兄姉たちは家にお

ならず、一人さみしくしていた自分と、もう帰ることができなくなった故郷を思い、うたった詩です。碑文は2連ですが、3連にと続きます。

式は、友人や来賓の祝辞の後「思想問題で警察に留置されたり、アキアジの密漁で罰金をとられたハミダシ者の詩碑が役場の前に建つたら、昔を知る人にシヨンペンをひっかけられはしないか」と参会者を笑わせながら更科があいさつをします。が、碑文の詩から過ぎ去った遠い時間のことが頭をよぎったのか、言葉がつまり一瞬の沈黙がありました。

その後、会場を移し、原田康子(小説家)、小笠原克(日本近代文学研究者・文芸評論家)の文芸講演会、祝賀会と進み、10月1日は終わったのでした。

このとき永田洋平たちは、詩碑建立を説得している最中に更科が「両親の開拓した土地に小さな碑を残したい気持ちはなくもないが」と語った言葉を胸に秘めていたのです。

摩周温泉夏まつり

摩周温泉夏まつり2010が7月17、18の両日、役場前駐車場で開催されました。今回は初めて、実行委員会の主管となり、町民有志の皆さんが中心となって、多彩なイベントを企画しました。17日は、ゲームやカラオケなどのイベントのほか、吹奏楽やバトントワラー、摩周蝦夷太鼓などの発表が行われました。18日は、恒例となった第15回全道摩周五入れ選手権大会が行われ、熱戦が繰り広げられました。



ヨーヨー釣りに夢中



子どもたちに大人気のくじ屋さん 何が当たったかな?



↑ハイカラ世代のお楽しみゲーム



迫力の摩周蝦夷太鼓



玉入れて熱い戦い



大人も子どもも弟子屈音頭の輪に入って



熱気に包まれる会場



会場に設けられた足湯で一休み

第49回弟高祭

第49回弟高祭が、7月17日から18日にかけて開催されました。今年のテーマ「Attain(達成する)」のもと、役場駐車場でのアトラクション披露や各クラスごとに趣向を凝らしたホームルームスペース、委員会や部活動の展示などが行われました。



役場駐車場でのアトラクション披露(3枚とも)



懐かしい雰囲気の出店

湯のまち川湯源泉まつり

湯のまち川湯源泉まつりが7月17日、川湯神社境内で始まりました。緑日「風の出店」として、射的や輪投げなどの出店が出たほか、アイヌ古式舞踏の披露も行われ、観光客や家族連れなどでにぎわいました。源泉まつりは、8月24日までの毎日、19時30分から開催されています。

アイヌの踊りに
お客さんも飛び
入り参加

